

NO.12 ■ 笹崎宮「放生会」の

風景の変化に関する考察 —おはじき人気から祭の質を考える—

環境文化史学研究室 安川 由紀

研究の目的

千年以上の永い歴史をもつ笹崎宮の放生会は、どのように守られ、伝えられてきたのか。現在の放生会はいかに行われ、人びとはそれに何を求めているのか。本研究は25年ほど前に現れた、放生会おはじきの頒布に関する祭事を中心として、現地調査を主とし、文献資料によって補いつつ、上の課題を考察した。

笹崎宮の歴史と景観の変化

福岡市東区にある笹崎宮（笹崎八幡宮）は、延長元年（923）に福岡県嘉穂郡築穂町から遷祀され、大分県の宇佐八幡、京都府の石清水八幡とともに三大八幡宮と呼ばれている。

笹崎宮では一年を通じて多彩な神事が行われているが、9月12日より18日に催される放生会（地元では、ほうじょうやと呼ばれる）は、5月3、4日の博多どんたく、7月1日より15日の博多祇園山笠とあわせて、博多三大祭として親しまれている。

かつて笹崎宮は西北方へ博多湾まで広く長い参道を延ばしていた。海浜は多くの松林に覆われて、白砂青松の景観を展開して、歌にも詠まれる名勝だった。平安朝の学者大江匡房の「笹崎宮記」によれば、笹崎宮はいちめんの松原に囲まれ、78里×30里の広大な社域を誇っていたという。室町時代には、筑前の守護大名大内氏が笹崎松の禁制を発して保護し、それは江戸時代にも継承されていた。しかし近代になると松食虫の発生によって衰え始め、明治44年に九州大学が建設されて以後、松原は産業化・都市化のうちに消滅した。松原の消失は笹崎宮の神事と祭礼にも大きな変化をひき起こしたが、その中で博多三大祭の一つ、放生会は現在でも盛大に行なわれている。

放生会概観

放生会は、最終日の9月18日に行なわれる鳩と鯉の放生を核とする一週間にわたる行事だが、今日では、神事そのものよりも、放生会おはじき、チャンポン、新しょうが、幕出し、露店といった「名物」によって、150万人もの参詣者を招き寄せている。

露店は一の鳥居から1キロほどつづく参道の両側、その周辺の駐車場、運動場に700以上の店が出て、朝10時ごろから夜11時ごろまで開かれ、放生会へ行くのは露店をひやかすことといった盛況をみせる。葉つきのまま束にして、一束500から1000円で売られるのが新しょうが、葉は風呂に入れ、根は食べる。チャンポンは喜多川歌麿の「ポツピンを吹く女」で知られたガラスの遊具、昭和40年代に復活され、露店でも売られているが、お宮が少数限定で頒布しているもののほうが上質で人気が高い。幕出しは、博多の町人たちが長持ちに家財道具一式を入れて集まり、松原の中で幕をはり、料理をし芸を楽しみ、見栄をはった盛大な行事で、大正末期まで行なわれた。いまは博多町人文化連盟によって、イベント風に再現されている。

放生会おはじき——制作と頒布と入手

これらの名物がそれぞれ古い由来をもつものに対して、放生会おはじきは、昭和54年に始まった新しい名物で、平成14年に24回目の頒布があった。発案したのはすでに引退した神職の一人だといわれるが、その由来はもう明らかでなくなりつつある。



平成14年のおはじき

おはじきは１０円玉ほどの大きさで、土を素焼きしたものに多様な図案が鮮明に多彩に色付けされていて、その可愛らしさが、玩具としてよりも民芸として人気を呼んでいる。作っているのは、博多人形師の集団白彫会の会員たちで、お宮の依頼によって人形制作と同じ手法でこしらえている。３０余個を１セットとして袋（平成１２年から箱）に入れ、近年はお宮が氏子に配る以外の１０００前後のセットが一般参詣者に２０００円で頒布されている。

平成５年以降、お宮と白彫会の制作者とで年ごとに「なつかしの童謡集」「博多の四季」「博多のいきもの」等といったテーマが決められ、それによって自由に作られ、おはじきの表現は、年を追って豊富多彩になってきて、人気は高まり、頒布の日には、前夜から参道に集まって徹夜して待つ愛好者が増加しつつある。



何度も登場する図柄「フグ」

平成１４年９月の放生会では、１２日午前８時からおはじきを頒布するという掲示が出された。１１日の午後６時ごろにはすでに数１０人が集まり、翌朝６時３０分に整理券１３００枚が配られる時刻までには、それを遥かに超える人びとが集合していた。人々はレジャーシートなどを敷いて、横になったり膝をかかえて仮眠したりして夜あかしをするのだが、屋台店も出て、飲み食いしたり、おはじきについて会話を交わし、世間話に興じたりして時を過ごす。なかには家庭内のもめごとやら苦しみなどまで、たまたま隣りあったもの同士で高声に語り合う人たちもいて、不思議な雰囲気の中に夜が明けた。

考察——放生会おはじきの意義

近年、おはじきは筥崎宮のお札といっしょにきれいな箱に収められて配布されている。入手できた人は、そのまま大切にしまっておくことが多いけれど、額に

広げて並べ入れて、室内装飾として楽しむ人たちもいて、お宮でも額入りのおはじきを特別頒価で配ることを始めている。小さくてささやかな物だが、沢山集めると一種の迫力を発散する。まったく実用からは離れているが、色付けの明るい多彩さと図案の多様な面白さが、逆にその素朴な魅力によって大勢の人の気持ちを引き寄せている。それにそれを入手することの困難さが、千人を軽く越える大勢の人びとが参道に徹夜して並び、見ず知らずの人たちが、一時的にうちとけて、さまざまな談話を交わす不思議な場を生み出す。解釈によっては、祭というものが成り立たなくなった現代において、おはじきの入手を願う人びとが神社の境内で夜を徹する場に、昔の祭りの古い本質的な位相が現れていると考えることもできる。



和紙をめくるとおはじきが詰まっている

おはじきが手に入って喜んでいる一人の若い主婦は、新聞社のインタビューに応じて、これで神さまと縁が結ばれたら嬉しい、という意味の発言をしている。こういう地元の人たちの心意に対応して、筥崎宮は神と人びとを結ぶ媒体としておはじきに意味づけをして価値を高めようと努め、制作者の人形師たちも、手軽にだが、年ごとに工夫を凝らして作るのを楽しみ、それによって祭に参加しているという思いをもっている。小さなおはじきの魅力は、このように筥崎宮を核として地元の人びとと人形師たちを結びつけて、放生会の伝統的な神事の系列の中に、神と人との縁をつなぐ、新しい、ささやかな絆を産み出しつつあるのだと考えられる。